書評

佐金武,『時間にとって十全なこの世界――現在主義の哲学とその可能性』 (勁草書房, 2015, ix+207 頁)

梶本尚敏

本書は分析形而上学における時間論を主題としている。本書の特色は何といっても、現代の時間論の発端となったマクタガート・パラドックスから現代の最先端の論争に至る幅広い先行研究の堅実なサーベイに基づいて、筆者独自の論証が綿密に展開されていく点にある。

さっそく本書の内容を簡単に見ていこう。1 章では、現代の時間論の礎を築いたマクタガートの時間の非実在性の証明の概観、およびそれに対する応答として生じた現代の時間論における主要な立場の紹介がなされる。マクタガートは「未来の出来事がやがて現在になり、最後には過去になる」という形で時間の経過を理解し、そうした変化こそが時間と空間との間の本質的な違いであると考えた。そのうえで彼は、こうした「変化の次元」としての時間が矛盾に通じることをマクタガート・パラドックスによって示し、それゆえに時間が実在しないと結論づけた。これに対し、現代の時間論では、主に二つのタイプの応答がなされる。一つは「変化の次元」としての時間を否定し、時間と空間との違いを変化以外の要素に求める無時制理論(永遠主義)である。もう一つは、「変化の次元」としての時間を受け入れたうえで、マクタガート・パラドックスに立ち向かう時制理論である。時制理論はさらに、どのような時間の経過のモデル・存在論を採用するかに応じて、以下の三つに分けられる。すなわち、過去・現在・未来の全てが実在すると考え、「出来事の過去性・現在性・未来性の獲得・喪失」によって時間の経過を理解する混合 AB 理論、過去と現在のみが実在し、「実在の総体の増加」によって時間の経過を理解する成長ブロック説、現在のみが実在し、「事物の生成・消滅」によって時間の経過を理解する現在主義である。本書の副題からも明らかなように、筆者が擁護するのは現在主義である。1 章の後半部分では現在以外の複数の時点の存在を認める他の二つの時制理論が問題に直面することを示したうえで、オントロジーとアイデオロジーの観点から永遠主義に対する現在主義の利点が示される。オントロジーの観点からは、現在の時点の存在しか認めない現在主義は、過去・現在・未来の全ての時点の存在を認める永遠主義より倹約的で優れている。また、時間の経過をどのように説明するのかというアイデオロジーの観点に関しても、永遠主義が「時間の経過が実在しないにも関わらず、時間が経過するかのように私たちが感じるのは何故か」という問題に直面するのに対し、現在主義はそのような問題に頭を悩ませる必要はない。

これ以降の四つの章は、現在主義のオン

トロジーから生じる困難を検討する 2 章と 3 章、アイデオロジー上の利点をより明確化する 4 章と 5 章に大きく分けられる。時制理論の中では現在主義は最も支持されている立場だが、それと同時に様々な問題に直面することで知られている。特に深刻な問題としてしばしば挙げられるのが、「過去に関する真理の基礎づけの問題」と「相対論との衝突」の二つである。筆者は 2 章で「過去に関する真理の基礎づけの問題」に、3 章で「相対論との衝突」に立ち向かう。また、4 章と 5 章では、現在主義が「変化の次元」としての時間をいかにして説明できるのかという論点に焦点があてられる。4 章では、現在主義の祖として知られるプライアーの「時間の経過はものの変化に他ならない」という見解に立脚し、その見解に対する様々な反論の批判的な検討を通じて「変化の理論」としての現在主義が確立される。5 章では、現在しか存在しないと考える現在主義にどのように過去と未来という時間の非対称性を組み込めるのかという問題が扱われる。

いずれの章も興味深い内容であるが、評者は後述する理由から特に 2 章と 5 章が優れていると考えている。そこで、以降はそれら二つの章に的を絞って、詳細を紹介していくことにする。

まずは、「過去に関する真理の基礎づけの問題」を扱う 2 章から見ていこう。多くの分析形而上学者は、「真理は存在に基礎づけられなければならない」という基礎づけの原理を受け入れている。たとえば、「オーストラリアには、ポッサムという動物が生息している」という言明は、オーストラリアにポッサムが生息しているという現在の事実によって真にされると考えられている。しかし、「足利義満は京都に住んでいた」のような過去に関する言明の真理を、過去の存在を否定する現在主義がいかにして基礎づけられるだろうか。この「過去に関する真理の基礎づけの問題」に対する筆者の応答は、二段構えになっている。まず、筆者は基礎づけの原理が、存在論の探求に先立つ前提とされていることに疑問を呈し、基礎づけの原理を拒否するという選択肢を提案する。しかしながらさらに筆者は、たとえ基礎づけの原理を受け入れるという選択肢を取ろうとも、現在主義は過去に関する真理の基礎づけの問題に対処可能であると論じる。ここでの筆者の論証は注目に値する。まず、筆者は過去に関する言明を、(1)「小泉純一郎はかつて黒髪だった」のような現在存在するものについての過去言明、(2)「かつて恐竜が存在した」のようなもはや存在しないものについての一般言明、(3)「ソクラテスは哲学者だった」のようなもはや存在しないものについての単称言明の三つに区分し、各々に対して別個の解決法を採用する。(1)に対しては時制的な性質や時制化された例化などといった、「現在存在する対象のかつて（これから）のあり方」に訴える解決策を採用する。(2)に対しては、世界や原子などの根本的存在者のかつて

(これから)のあり方による解決策をとる。(3)については、単称命題の存在がその構成要素に依存するという前提を擁護し、現在主義の存在論においてソクラテスがもはや存在しない以上、「ソクラテスは哲学者だった」のような言明は単称命題を表現しておらず、それゆえに真理の基礎づけの問題がそもそも起こらないと結論する。過去に関する真理の基礎づけ問題は、現代の時間論のホット・トピックの一つであり、これまでにすでに現在主義の側から数多くの解決策が提案されてきた。しかしながら筆者が指摘するように、従来の現在主義者の応答では、本来区別されるべき過去に関する言明が一緒くたに扱われており、それゆえに個々の事例で何が問題になっているのかを掴みそこなっていた。筆者はこうした錯綜した論点を丁寧に解きほぐしたうえで、これまでには見られなかった多元的なアプローチを説得的に提示している。

次に、5 章を見てみよう。5 章では、現在主義がいかにして時間の非対称性を説明できるかに焦点があてられる。過去と未来の間に存在論的差異を認めない現在主義が、いかにして「未来は開かれているが、過去はすでに固定されている」という比喩で表現されるような時間の非対称性を扱えるのか。著者はこの難題に、グローバルに拡張されたルクレティウス主義の立場から取り組む。現在主義は、過去に関する真理の基礎づけ問題にどのように取り組むかに応じて、様々なバリエーションに分けられる。グローバルなルクレティウス主義とは、世界が時制的な性質を持つことによって、過去(未来)時制の言明が真にされると考える立場である。たとえば、「かつて恐竜が存在した」という過去時制の言明は、かつて恐竜が存在した世界だったという過去時制の性質をこの世界が今持つことによって真にされる。この立場を採用したうえで、筆者は以下のように議論を進めていく。「未来は開かれているが、過去はすでに固定されている」という非対称性は、グローバルなルクレティウス主義では「この世界は今、関連する全ての過去時制の性質を持つが、全ての未来時制の性質を確定的にもつわけではない」と言い換えられる。このことを考慮すると、ある命題 p が成立する世界であるという現在時制の性質をこの世界が今持っていることから、未来において p が成立する世界だったという過去時制の性質をこの世界が持つということは帰結するが、過去において p が成立する世界だろうという未来時制の性質をこの世界が持つということは帰結しないと結論できる。さらに前の文中の「未来において」と「過去において」を時制的な性質を用いて書き換えると、次のように表現できる。すなわち、p が成立する世界であるという現在時制の性質をこの世界が今持っていることから、p が成立するだろうという未来時制の性質を持つ世界だったという過去時制の性質をこの世界が持つということは帰結するが、p が成立する世界だったという過去時制の性質を持

つ世界だろうという未来時制の性質をこの世界が持つということは帰結しない。このようにして、筆者は過去と未来の存在を措定することなしに、現在の中に過去と未来の間の非対称性を導入してみせる。その後、筆者は自身の見解に対して想定される三つの反論に対する応答を試みる。本章が注目に値するのは、現在主義にとって重要であるにも関わらず長らく無視されてきた時間の非対称性の問題に脚光を当てたことにある。「過去に関する真理の基礎づけの問題」や「相対論との衝突」に対しては多くの現在主義者が取り組んできたものの、奇妙なことに時間の非対称性の問題はほぼ手つかずのまま残されてきた。筆者の取り組みはこの現状に風穴を開ける野心的な試みであり、さらにグローバルなルクレティウス主義の枠組みを用いて他に類を見ない解決策を打ち出している。

このように興味深い論考が数多く含まれている本書であるが、いくつかの点に関しては不満がないわけではない。そのうちの一つにだけ、本書評では言及しておこう。永遠主義を支持する評者の目には、本書での永遠主義の扱われ方が不当に軽いように思われる。たとえば、4 章の 134 頁で「無時制理論のもとでは変化と単なるバリエーションを区別できないことはすでに指摘したが」と書かれているが、該当する 118 頁でなされているのは「因果によって時間と空間を区別する無時制理論の試みが成功する見込みは薄い」という指摘に過ぎない。そもそも全ての無時制理論が因果によって時間と空間を区別するわけではないうえ、因果による分析がうまくいくかどうかでさえ論争中のトピックであり、ここでの筆者の診断はいささか性急すぎるように思われる。また永遠主義に対する筆者の他の反論も、現在主義を擁護する論証に比べると不徹底さが目立つように思われる。

しかしながら、この点によって本書の価値が大きく損なわれるようなことは全くない。というのも、本書の主眼はあくまで現在主義の擁護であり、その目的は十分に達成されていると考えられるからだ。現在主義と永遠主義のどちらが正しいのか、あるいは両方とも退けられるのかは、今後さらなる議論を通じて明らかにされていくだろう。いずれの立場を取るにせよ、本書で展開されている筆者の考察はどれも示唆に富むものであり、永遠主義と現在主義の論争の未来に大きく貢献している。また、はじめにも書いたように、本書では分析形而上学の時間論の過去の歴史、現在の論争状況が平易にまとめられており、分析形而上学の時間論の大まかな見取り図も与えてくれる。そうした意味で、本書は分析形而上学の時間論に携わる専門家にとって必読の書であるだけではなく、分析形而上学の時間論の初学者に対しても推薦できる一冊と言えよう。